

2-1. ミッション実現戦略分シンポジウムについて

高宮広土

On the Symposiums for the Actualization Strategies for the Mission

TAKAMIYA Hiroto

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

International Center for Island Studies, Kagoshima University

生物と文化の多様性保全と地方創生にかんするシンポジウム

本プロジェクトの正式な名称は「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」で、島嶼研が「生物と文化の多様性保全」を、理工研が「地方創生」の研究を担当している。本プロジェクトは今年で2年目を迎える。その正式な名称が示唆するように島嶼研のメンバーは「生物と文化の多様性保全」の研究を推進し、理工研のメンバーは「地方創生」を探究することが大きな目的の一つである。と、同時にもう一つ大きな目標がある。それは、私たちの研究を地元に戻元することである。奄美群島や周辺の離島における研究は研究者間に共有されることは当然であるが、それらの島々で生活を営む人々も私たちがどのような研究を実施しているのかについて関心を抱く人は少なくない。そこで、地域への還元の一つとして、私たちは2022年度と2023年度にシンポジウムを開催した。以下に簡単にシンポジウムについて報告したい。

2022年度

2022年度のシンポジウムは2023年2月19日(日)13:00~17:00に奄美市市民交流センター大多目室において開催された。シンポジウムのタイトルは「奄美群島における『生物多様性』と『地方創生』」であった。プログラムは以下の通りである。

2023年2月19日シンポジウム プログラム		
岩井 久	鹿児島大学理事	開会挨拶
高宮 広土	鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長	趣旨説明
川西 基弘	鹿児島大学教育学部 植物班	奄美大島の森林をモニタリングから理解する
久米 元	鹿児島大学水産学部 水圏班	リュウキュウアユの生活史にかんする研究
安藤 匡子	鹿児島大学共同獣医学部 陸上動物班	奄美大島のマダニとダニ媒介性感染症
島居 享司	鹿児島大学教育学部 地域研究班	島内連携の確立による漁業経営の振興
山城 徹	鹿児島大学大学院 理工学研究科	地域ビッグデータを活用した、水産・海洋産業のスマート化と島嶼部での再エネ高効率利用にかんする研究
加古 真一郎	鹿児島大学大学院 理工学研究科	AIとリモートセンシングによる海洋プラスチック汚染研究
江幡 恵吾	鹿児島大学水産学部 水圏班	漁獲予測に基づくスマート水産業の実現に向けて一漁業者と連携した共同調査の取り組み
市川 英孝	鹿児島大学法学部	離島における再エネ活用地域利用について
質疑応答及び全体ディスカッション		

多様性部会からは奄美を対象にしたモニタリング、貴重種であるリュウキュウアユ、ダニによる感染症および漁業経営について、地方創生部会からは島嶼における海域ビッグデータ、海洋プラスチックゴミ、スマート水産業および再エネについての発表があった。参加者は会場では51名で、その中には高校生も参加していた。また、遠隔では60名の参加があり、質疑応答および全体ディスカッションでは多くの質問や意義のある回答があった。

2023年度

2023年度のシンポジウムは2023年10月1日(日)13:00~17:00に奄美分室横の新たなスペースであるセミナー室で行われた。ここで少しこのセミナー室について触れてみたい。

奄美分室は2015年4月に旧名瀬保健所跡に設置されたが、実験などは名瀬公民館にあった奄美島嶼実験室が利用されていた。2019年4月に奄美分室はこの保健所跡から奄美群島大島紬会館6階に移転した。その際、奄美分室とほぼ同様のスペースを奄美市・本場奄美大島紬組合から分室横に提供された。このスペースを改修し、簡易な実験のできる多目的室と研究会などが開催できるセミナー室がこの7月に完成した。今回のシンポジウムはこのセミナー室会場となったもので、このスペースを利用したのシンポジウムは初めての開催であった。

シンポジウムのタイトルは「奄美群島周辺における自然環境保全とブルーエコノミー」であった。プログラムは以下の通りである。

2023年10月1日シンポジウム プログラム		
井戸 章雄	鹿児島大学理事	開会挨拶
高宮 広土	鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長	趣旨説明
鶴川 信	鹿児島大学農学部	世界遺産地域における自然環境モニタリングシステムの構築
藤田 志歩	鹿児島大学共通教育センター	奄美大島における野生動物モニタリング：生物多様性保全に向けた取り組み
高山 耕二	鹿児島大学農学部	アマミノクロウサギが農家の悩みのタネに？
鈴木 英治	鹿児島大学国際島嶼教育研究センター	奄美の植物への地球温暖化の影響
江幡 恵吾	鹿児島大学水産学部	海の天気予報の構築に向けて～漁業者スマートCTDによる精度向上～
小針 統	鹿児島大学水産学部	漁師のための海予報～海洋ビッグデータを利用したスマート化技術開発～
日高 弥子	JAMSTEC／鹿児島大学理工学研究科	地方行政と研究の連携から生まれた海ごみAI：海洋プラスチック問題への挑戦と現状
市川 英孝	鹿児島大学法文学部	小規模有人離島での再エネ活用による地域活性化～宝島での取り組み
質疑応答及び全体ディスカッション		

多様性部会からはまず前回と同様に奄美大島における研究の重要性の説明があり、またモニタリングによって明らかになりつつある植物や陸上動物の分布や行動に関する紹介、アマミノクロウサギの農作物被害とその対策、地球温暖化による奄美大島の植生への影響予測があった。地方創生からは海流や塩分濃度などのビッグデータの収集とそれらの漁業への活用の紹介、海流プラスチックゴミ対策としてのAI技術の展開、および宝島における再生エネルギーの利用についての説明があった。

参加者は会場で51名、遠隔で35名であった。講演内容の詳細は次の章で述べるが、モニタリングの必要性、特に長期間における必要性への理解、アマミノクロウサギの保護による農家への被害と対策、温暖化による植生への影響に多くの質問があった。またビッグデータを利用したスマート漁業に関する質問や海流プラスチックゴミの問題の深刻性とその対策について参加者は興味深く質疑応答を行っていた。宝島における再エネは奄美大島でも活用できないかなどの活発な意見も投げかけられた。2回のシンポジウムは、奄美の方々が「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」に大きな関心があることはひしひしと伝わってくるものであった。



講演の様子



総合討論の様子